

# 水彩都市 江東の誕生

江東区深川江戸資料館

江東区を含む隅田川以東の歴史は、広大な低湿地を開発し、土地改良を繰り返してきた歴史でもあります。その過程で開削された小名木川などの河川が、江東の地に特色ある歴史と暮らしを育み、水彩都市江東を形づくっていきます。

21号から26号に亘って「水彩都市・江東の歴史と暮らし」について見ていくことにします。

今号では、土地の成立と川の開削を見ていきましょう。

## 中世の低地 江東

中世の江東は、1200年代前半までに成立した「かさいのみくりや葛西御厨」とよばれる伊勢神宮の荘園の一部でした。荘園とは、主に京都や奈良に住む貴族や寺社の私有する田地のことで、奈良時代から戦国期の終わりまで存在します。

「葛西御厨」は隅田川などの河口に広がり、アシが生い茂る低湿地帯でした。連歌師そうちよう宗長は、永正6年(1509)7月から12月にかけて房総方面を旅して『あづまじのつと東路の津登』と題する紀行文を残しています。江戸の館を出発して舟で半日ほど隅田川を下り、わたしば今井の津頭(図版参照)で上陸して馬で中山(市川市)へ向かうというコースをたどります。帰りは市川から小岩を通して江戸に至り、同書の中に「葛西の御厨」の情景を描写しています。そこは、河川と堤防に囲まれた里であり、人々はひっそりしていて、雪が降りだすと山奥を旅しているような感じであったと鄙びた情景が描かれています。とはいえ、堤防は盛り土による整備がなされ



今井の津頭 わたしば 『江戸名所図会』より

ていて、また、人馬の継ぎたてがあつたり水上交通が発達していて、のちに家康が江戸に来て本格的な開発に着手していく前提が整っていたことがわかります。

## 形づくられる江東

天正18年(1590)江戸入りした徳川家康は、城下町江戸の建設に際し、既存の水上交通・流通を取り込むことに努めます。小名木川の開削は、その一環であったといえるでしょう。小名木川は、正保年間(1644~48)に作られた地図に「ウナギサワホリ」という名称で既にみえています。小名木川は、関東内陸の水運を江戸に直結させるために海岸線に沿って開削されたといわれます。

この時期、中世には沿岸であった亀戸は、内陸になっています。

このころまでに、江戸はほぼ基本的な骨格を整えており、以降は本所・深川などの周辺地へ市街地の拡大をしていくこととなります。正保までに深川村、海辺新田、深川獵師町、八右衛門新田、

亀戸村、海辺新田宝六島が成立し、正保年間には亀高村、荻新田、又兵衛新田などが次々開発されていきました。

## 江戸時代の江東と河川

明暦3年(1657)に起こった「明暦の大火」は江戸の大半を焼きつくし、幕府は防災のため江戸の改造に努めます。具体策のひとつは、武家屋敷や寺社を郊外移転させることでした。江東の地はこの移転先として明暦の大火後に土地の造成が進みます。砂村新田、霊巖寺門前町、八郎右衛門新田、太郎兵衛新田などが、概ね万治から寛文(1658～73)にかけての成立です。

延宝8年(1680)『江戸方角安見図』では、中央を東西に小名木川、その北側を平行して豎川、南北に横十間川、大横川が流れています。また、深川には六間堀、五間堀、元木場の材木堀がみられ、掘割りが元木場を中心に発達していったことがわかります。

掘割りの開削と土地の造成は、つねに同時に行なわれており、「水彩都市」は江東の原風景であったことがわかります。

## 橋と渡し

武家屋敷の移転や町場化によって人口が増大し縦横にめぐる掘割りをクロスして人や物が動く必



明治40年『東京市15区』のうち「㊦深川区全図」(人文社 復刻)

要が高まってくると、橋や渡し場が生まれていきました。

元禄年間(1688～1704)には、隅田川に新大橋と永代橋が架けられ、江東は大都市江戸と直結することになります。これにより、江戸の中心部との行き来はさらに活発になり、やがて深川の大半が江戸の町に組み込まれていくのは正徳3年(1713)です。

隅田川河口に架かる永代橋は、文化4年(1807)富岡八幡宮の祭礼の人出で落橋した事件で有名ですが、日本橋側の人々にも富岡八幡の祭礼が身近な行事となっていたことが知られます。

また、亀戸から現在の江戸川区へ渡る逆井の渡しは、江戸から亀戸を経て下総佐倉へ続く「さくらみち佐倉道」の重要なポイントでした。

## 明治以降の江東と河川

明治40年(1907)頃の『深川区全図』『亀戸町大島町』『砂村全図』を見ると、江戸時代に開削された掘割りを基に、それらを結んだ新しい河川が開削されているのがわかります。近郊農村であった砂村には、毛細血管のように用排水路が発達し、養魚池がたくさん見られます。木場には貯木場が整備されていきます。

いっぽう小名木川・豎川・横十間川などに沿って紡績、化学肥料、セメントなどの大工場ができていきます。工業用水に恵まれ水運の便がよかったこと、これら掘割り沿いに大規模工場の建設に適した広大な武家屋敷の跡地があったことが江東の地に工場が集まった要因として考えられます。

中世から近代に至る江東の歴史を概観したとき、その歴史は、水と切っても切れないつながりを持ち続けて来たものであることがわかります。そして、海岸線付近に新しい運河を開削しながら海の埋め立てを進め、開発を繰り返す「開発の歴史」は、「臨海副都心」と呼ばれる街の建設に見られるように、現在も続いています。